

## Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画

## talk baton 09 活動報告

## talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

## U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などごつぱらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>

talk baton 09  
「建築と地方」

ゲスト  
四国食べる通信  
編集長 眞鍋邦大氏  
地元香川県で四国の食を通じて、地方と都市・生産者と消費者を結び付ける仲人であり、編集長。

9回目となったトークバトンの会場は、初めて関西を離れ、長閑でどこか懐かしい風景が続く香川県仏生山での開催。

仏生山温泉にほど近い一軒家を改築した四国食べる商店でピンク色のポロシャツでテンション高めの眞鍋氏が出迎えてくれた。

## ■地域おこしとは

地域おこしとは何かという問い掛けで始まったトークバトン。移住者が増え、人が集まること・地域経済が潤うこと・ローカルベンチャー等の産業が生まれること等、色々な捉え方があるが眞鍋氏の中で定義している事があると言う。

眞鍋「地域おこしとは、そこに暮らす人々が誇りを持つこと。そして地域での活動量が増えていくこと。」活動とは大げさなことではなく、近所のおじいちゃんおばあちゃんが掃除をしながら交わす挨拶もその活動のひとつだ。

続いて一枚の瀬戸内海の風景写真が出てくる。穏やかな海とそこに浮かぶ大小幾つかの島々。地元の人は何も感じない普通の景色も海の無い地方ではこの写真でのリアクションが大きく異なるとか。

眞鍋「視点とか、立ち位置とか、ものの見方を変えることは非常に重要。これまでにあるモノを、これまでにないカタチでやってみる事を意識して取り組んでいる。」

序盤からどんどん早口で喋っていく眞鍋氏。漠然と捉えていた地域再生というものがのっけから崩されていくスリリングな展開。

## ■負け組の下地

眞鍋氏の経歴は一見華やかである。地元の進学校を卒業後、東京大学に進学し、卒業後はリーマン・ブラザーズに就職し、ほどなく結婚。まさに勝ち組である。が、その裏には、浪人・留年・離婚・倒産と様々な負けも経験しており、一時期は住所不定無職までになったこともあるとか。

眞鍋「地域で仕事をやっているとうまくいかない事ばかりだが、あの頃に比べると全然問題ないと思える。」負けた事が自分の人格形成の元になっていると笑いながら語る眞鍋氏。その話し振りからも何か人を惹きつける魅力を感じた。

## ■地元に戻る3つのきっかけ

東京の第一線で働きつつも、現状の日本に何か違和感であったり閉塞感を感じていた眞鍋氏。人口が高齢化し、日本という国自体が高齢化を迎え、多様性のある社会を人々は望んでいるのではないか。その多様なニーズを受け止めるには、女性や地方等の新たな<sup>うづ</sup>器が必要と感じていた。リーマン・ブラザーズ倒産後、地元に戻る機会があった眞鍋氏。それまで帰省で戻ることであっても、一定の期間を地元で生活することはなかった眞鍋氏はあることに気付く。

眞鍋「単純に田舎の人の方が笑顔が多いんです。可処分所得は少ないけど、可処分時間がすごく多い。けど、その良さに誰も気付いていない。」もったいないと感じていた眞鍋氏。メディアでは地方は疲弊していると伝えているが、個人の暮らしを見れば本当に豊かな暮らしをしているのは地方に暮らす人々ではないかと考え始めるが、まだその時点では地元に戻るまでの決意には至りません。

その眞鍋氏を動かしたのが2011年に起きた東日本大震災と大阪ダブル選挙だ。



## Member's Forum

会員投稿の頁

**眞鍋**「あの震災でパラダイムシフトが起きたと感じています。僕自身が死を身近に感じ、安心・安全の確保が重要になり、自分自身の中で優先順位が変わった。」すぐにはないが、10年20年の長いスパンで人々は地方に目を向けるのではないかと。同じ年の大阪ダブル選挙では、維新の会が圧勝を取める。眞鍋氏は都会で働く自分のアンテナのズレを感じ、地方で暮らす人々が何かを求めているのではないかと考え、翌年に地元に戻ることを決意する。

### ■メディアになる

眞鍋氏は地元に戻ってきて株式会社459を立ち上げる。

**眞鍋**「地元に戻ってきて、まず意識したことが自分自身がメディアになること。今のSNS時代はスモールでも、ローカルでも、パーソナルでもメディアになれる時代になっている。」地域から情報を発信するには、メディアに載るか、メディアを作るか、メディアになることが必要と考え、資金も知名度も技術もない眞鍋氏はSNSを活用することで、自分自身がメディアとなり、情報を発信していくことを決めた。

### ■様々な事業の展開と拡がり

地元の香川県ではあるが、高松ではなく小豆島で起業した眞鍋氏。

**眞鍋**「島は日本の課題の縮図であり、問題点を多く抱えているが、島は瀬戸内の原風景であり、地元の人が気付いていない素材がありポテンシャルに溢れていた。」そんな眞鍋氏が小豆島で始めた最初の事業がボン菓子屋。斜陽産業であったボン菓子を島々の食材を活用し、オシャレに販売することで単純にウケた。マルシェや結婚式のイベントや食育の学校行事など様々な展開を見せていく。ボン菓子を通じて地元の食材、つまりは島を伝えることができ、地元の人々が地元を知るきっかけになっていった。また関西の大学生を小豆島に教師として迎え、子供達に勉強を教え、その対価として眞鍋

氏が小豆島を案内するというティーチングツアーも面白い試みである。当初、島の子供達のために考えた企画であったが、逆に教える側の学生達の方が島の人々や魅力に元気づけられる結果になったという。また、自宅を改修し、ポンカフェを営業。素麺をイタリアン風にアレンジすることで、予想以上の集客を得ると、カフェが地元の人々の井戸端会議の場となった。

これらの事業とも共通しているのは、もの見方を変えただけで、素材自体はそこにもとからあったものを活用しただけである。

### ■食べる通信の仕事とその展開

様々な事業を経験し、眞鍋氏のテーマは『食』へと集約していく。

**眞鍋**「食は全世界共通であり、全ての人にとって理解しやすく、分かりやすい面がある。更に最も重要なのは、食は地域と紐付いている点である。食を通じて、地域を語る事ができ、食を通じて『いいね』を積み重ね、その『いいね』が地域の誇りになる。」こう語る眞鍋氏は2014年、株式会社四国食べる通信を立ち上げ、代表兼編集長となる。この食べる通信、現在全国でも拡がりを見せている非常に面白い試みである。読者は定期購読契約を結ぶと、隔月で四国にまつわる食材とその食材に関わる生産者を取材した冊子が届くのである。云わば、付録が食材の情報誌である。

**眞鍋**「僕らは生産者の生き様や生産の背景を食材とともに届けているが、送った後が重要だと感じていて、フェイスブック上で購読者が生産者に直接『ごちそうさま』や『ありがとう』を伝えることができる今までにない仕組みを作った。このような購読者がいずれば四国に遊びに来て、繋がりが出来るのではないかとこの思いで今も続けている。生産者と消費者を繋ぐ懸け橋になればとの思いで。」食を基軸として現在は様々な横展開を見せている眞鍋氏の試み。トークバトンの会場となった四国食べる商店は、眞鍋氏の生家を改築して商店とし、お店を持たない生産者やモノづくり屋にモノを売る場所として貸したり、遂には食べる商店向かいの休耕地を食べる農園として開墾し、眞鍋氏自身が生産者として、食を様々なカタチで様々な人に届けようとしている。

### ■建築との関わり

そんな眞鍋氏であるが、建築との関わりもあり非常に興味深い。食べる農園では、田舎で問題となっている竹害を解決する一助として竹で作るビニルハウス（バンブーハウス）を自分達で材料を取獲し、組み立て

てしまった。また、近年地域おこしの一つのツールとして注目されているリノベーションスクール（実際の遊休不動産の改築案を提案→不動産オーナーにプレゼン→実際に改築し、不動産の再生を通じてまちでの新しいビジネスを生み出し、地域を再生する実践型研修）に北九州で参加し、リノベーションを実践している。更に今年のおくには香川県丸亀市で開催される四国初のリノベーションスクールを主催者として開催する予定だとか。リノベーションスクール自体が、普段元気のない町の潜在的な想いを浮き彫りにできる非常に有効な手段だと話す眞鍋氏。

**眞鍋**「コトを起こすこと自体が全て、地域の活性に繋がっている。このスクールも町と人を繋げる良い機会になり得るはずだ。」

### ■二極化が生む可能性

常に外に対して発信し続けてきた眞鍋氏。地方から都会へ、そして世界へ。

**眞鍋**「現在、世の中の二極化がどんどん進行している。一つは資本主義による大量生産と大量消費。つまりそれは平均化と標準化の世界であり、それで皆が満足することはない。その対極にあるのが手間暇だと考えている。そして、それこそがローカルが持っている価値じゃないかなと。食べる通信も儲かるわけではないけど、生産者の手間暇というものをもっと伝えていきたいと思っている。」

## talk baton 09 を終えて

「笑顔が多い町はそれだけで活気があり、幸福なんだ。」ふと自分が日常でどれだけの笑顔を作っているかとハッとさせられる瞬間だった。眞鍋氏のキャッチコピーは「高学歴・低収入・ハイテンション」。今までにない立ち位置を確立している眞鍋氏には、様々なジャンルの面白い人が集まり、その繋がりがから色々なモノやコトが生まれてきている。バカになることが大事なこと。最後の言葉は、人を惹きつける人間味に溢れた眞鍋氏自身の等身大の言葉のように聞こえた。

対談日：2016.07.16  
場所：四国食べる商店  
(香川県高松市)  
モデレーター：西森 史裕 (大林組)

